

Thomasin von Zirklaere “Der Wälsche Gast” (イタリアの客人) についての一考察

——中世の「イタリア人」が何故「ドイツ語」で詩作をしたのか——

清水 朗

1

トマージン・フォン・ツィルクレーレ (Thomasin von Zirklaere [Zirclaria] [1187/88 頃～没年不詳]) は北東イタリアのフリウール (Friaul) に生まれ育ち、1204 年以後は当地アクイレヤ (Aquileja) の総大司教になったとされる⁽¹⁾。当時の神聖ローマ帝国の南西端に位置するこの地ではドイツ (語圏) 文化の影響も強く、トマージンはドイツの言語や騎士道に触れる機会も多かったと考えられている⁽²⁾。

トマージンはドイツ文学史では、1213 年に当時のローマ教皇イノセント三世が十字軍資金の調達のための献金箱をドイツ各地の教会に設けるべしとしたことに立腹し、教皇批判を行ったヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walter von der Vogelweide [1170 頃～1230])⁽³⁾ に対する反論をその著書 *Der Wälsche Gast* (1215/16) で行なっている (11191～11200 行) 事実で何よりも取り上げられることが多いが、この小論では二人の論争自体のみならず、トマージンの持っていた文化・言語的背景及び——それに関連しつつ——彼の皇帝と教皇、さらには当時のドイツとイタリアに対するスタンスにも焦点を当てて考察を行ないたい。

2

当時北イタリアの文語には西ヨーロッパにおいて普遍的な知識人用語であったラテン語以外にも南仏のトゥルバドゥールの作品により知られる古プロヴァンス語があった。トマージン自身も——その作品は散逸してしまっているものの——古プロ

ヴァンス語での詩作を行ったと自ら述べている⁽⁴⁾。時代的には約一世紀後のダンテもその主著『神曲』(1306~1321)執筆以前に12世紀のトゥルバドゥールの影響を受け、さらに本格的に1220~50年頃に皇帝フリードリヒ二世のもとで栄えた「シチリア派」の詩作に大きな影響を受け、いわゆる「清新体 (Dolce stile nuovo)」を確立していることは良く知られた事実である。ダンテは当時のトスカーナ方言で詩作したが、後のルネッサンス期イタリアの「言語問題 (Questione della lingua)」においてピエトロ・ベンポなどにより将来イタリア語の規範がダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョという14世紀の三大トスカーナ詩人の文語に求められることになったにも関わらず、自身は規範をシチリア方言をも含むイタリア各方言からなる混成語に求めていた⁽⁵⁾。並べて論じられることこそ少ないものの、南仏詩人とその言語の影響が100年という時を隔ててトマージンとダンテという二人の詩人を結び付けているのは当時のトゥルバドゥールの詩人達の影響力の深さを物語る興味深い事実である⁽⁶⁾。

こうしてラテン—南ヨーロッパ的教養をつんでいたトマージンがあえてドイツ語によって、Der Wälsche Gast (イタリアの客人)と題する14752行からなる大著を著したことは、単に著者が日常ドイツ語に接する機会が多かったという理由だけでは説明しきれない事実であると思われる。ドイツの教養層に向けて主張を行ないたいのであればこのLehrdichtung (教訓詩)と通常分類される作品はラテン語で執筆されていても事足りたはずである。それにもかかわらず何故ここでドイツ語を用いたのだろうか⁽⁷⁾。

一つの可能性としては前述のヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデによる教皇イノセント三世への批判への反論という理由が考えられよう。ドイツ語を使い教皇批判をした者に対しいわば同じ目線で反論をする、あるいはヴァルター自身にもその反論がより直接的に受け取られる、ということはそれとして十分意味のあることであろう。しかし直接に反論が行なわれているくぐりはずか10行(11191~11200行)、そこから引き出されるより一般的な教訓(他人の言動の意味を故意に歪めて解釈し、攻撃をすることへの戒め)を含めても60行(11191~11260行)にすぎない。これは全体(14752行)からみれば極端に少ない比率である。

次の可能性としては「ドイツの騎士達 (“tiuschu riterschaft” [11347行])」とドイツの地の高貴な王侯達 (“Edele vürste von tiuschen landen” [11731行])」へ向けて十字軍への参加を直接に促す、という著者の意図が考えられる。当時の騎士や王侯貴族は一般にラテン語を解さなかったことを考えるとこの可能性は全く否定で

きなくもないが、しかし当該箇所も 484 行 (11347~11830 行) にとどまり、全体からするとごく一部を占めているに過ぎない。

他のより現実的な可能性として、イタリア人である自分が自らドイツ語で (長大な) 作品を書くことで “welsch” と “tiutsch” のコントラストをドイツ人の前で鮮明に示そうとした、ということが考えられよう。“welsch” とは “tiutsch” に対して近世初期までは主に「イタリアの」、その後は主に「フランスの」という意味で用いられ、いずれの場合も、ドイツ人の隣人でありながら文化的優越性を持ち、時にはドイツ人のアイデンティティを脅かす存在を表わす言葉として用いられてきた⁽⁸⁾。するとトマージンはそのタイトルに “welsch” というという言葉掲げ、さらに本来「異 (邦) 人」を示す “gast” を付け加えることで、読者 (聞き手) たるドイツ人・ドイツ語話者に謂わば異化効果を齎そうとした可能性が考えられるのである。つまり、自分の母語ではないドイツ語を用いることによって、逆説的に自らはドイツ人ではないことを浮き彫りにしようとしているのではないか、ということである。これにより、ドイツ人の側は逆に自らのドイツ性・非ラテン性をより明確に意識するようになるだろう。

本稿ではこの三番目の可能性を最もありうべきものと考え、それを前提としつつ、冒頭で述べた考察を進めることとする。

3

前述のヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデは、その生涯を主に「皇帝党」たるホーエンシュタウフェン家の諸侯に仕え、国家が体现する「帝国理念 (Reichsidee)」を賞賛し、顕揚することに捧げたとされることが多いが、そこには中世的な「教皇党—皇帝党」の対立というよりも、むしろ近代のそれに近い「ドイツ—イタリア」の対立が——同時代人よりもはるかに早く——現れているのではないかと、いう点を以前指摘したことがある⁽⁹⁾。それではその対立軸の対極に位置するとも言えるトマージンにおいては事情はどうであっただろうか。

トマージンは 1209 年にヴェルフ家のおットー四世が神聖ローマ帝国皇帝に戴冠される際にローマへと同行しているが、Der Wälsche Gast においては「以前権勢高き皇帝の力を持っていた者が今や王の力すら持っていない」(3423~3426 行) と批判するようになり、さらにその宮廷に飾られている三頭のライオンは高慢な心を表わし、半羽の鷲は榮譽の欠如の印であるとする (10470~10512 行)。

オットー殿がロンバルドにいらした時、
大変な失政を行なったのですが、
それでもローマにもまた来られたのです、
皆様ご存知のように、
その時私はそこへ同行し、
宮仕えをすることになったのは事実です。
8週間以上もの間にわたって。
その時私には
殿の紋章に型取られた
三頭のライオンと半羽の鷲がいたく気に入りませんでした。
その双方ともが確かにも
節度を外れて (unmaezeliche) いたからなのです。
三頭のライオンはあまりにも多すぎました。
一頭のライオンを御す者でさえ、
それを思い通りにすることができれば、
優れた者と思われます。
またしかと知っていただきたいのは、
半羽の鷲には足りないものがあるということです。
本当のことを申しますが、
半羽の鷲は飛ぶことができないのです。
一方 (=鷲) では度合いが低すぎ、他方 (=ライオン) では高すぎる。
ものの分かる者には知れたことです。(10471~10492 行)

一頭のライオンは高き心を表わしますが、
三頭のライオンは高慢な心を表わすのです。(10495~10496 行)

鷲はかくも見事に飛び、
それが高く飛ぶのは榮譽を表わしますが、
半羽の鷲はしかしながら
榮譽の欠如を表わすのです。(10501~10504 行)

羽を一つ欠いた鷲がいくら高く飛ぼうとも、

地に墜ちざるを得ないのです。(10511~10512行)

これと同趣旨の内容が後の12351~12376行と12434~12448行にも述べられ、オットー四世の節度(mâze)の欠如が繰り返し批判されている。

前述のヴァルターに関する説明でも述べたように、オットー四世は教皇党の家系であり、教皇を擁護する立場にあるトマージンがその節度のなさを繰り返し批判しているのはその意味で一貫性を欠いているように見える。

さらにトマージンはカトリックの司教に対しても批判の矛先を向ける。

司教達がいかに暮らしているかを御覧なさい。
誰であろうとそのように暮らす者達のために
教会に施しをする者がいるとは！
御覧なさい、そうして彼らは教えによって
誰も目覚めないようにしている様を！(6392~6396行)

御覧なさい、自ら説教もできぬ司教が、
自分の荣誉と富を
いかにして守っているかを、
そして学ぼうとする者がいるのに
その者を助けようとはしないことを！(6541~6545行)

学校で貧しい暮らしをする者達に
必要なものを与えねばならぬ司教は、
自分の周りの殖財に励む者達に与え、
学校で貧しい者達に何が起きているかは、
全く気にとめようとしません。(6553~6558行)

貧者を無視しひたすら殖財に励む司教たちを批判するトマージンにはその姿勢において、イノセント三世が自らとその取り巻きの私腹を肥やすために十字軍行のためと称して、ドイツの教会に献金箱を設けているとして教皇を批判したヴァルター⁽¹⁰⁾と通低するものがある。ここでもまた、トマージンにはローマ教皇(=カトリック教会)を無批判的に擁護する姿勢は見られないのである。

ここからもヴァルターに対して長い間付きまっていた「教皇党—皇帝党」との対立の構図における皇帝党への熱烈な擁護という定説が必ずしも正しくないのと同様、トマージンにとっては丁度逆の意味で、つまり常に教皇側を熱烈に支持していたわけではない、という事態を確認することができるのだ。

4

その半面で、ローマ皇帝とは最も不仲であったとされるホーエンシュタウフェン家をトマージンは必ずしも批判はしない。それどころか1198年に教皇となったイノセント三世とその後約30年間も敵対関係にあったフリードリヒ二世を賞賛すらしているのである。

我らの息子（フリードリヒ二世 [筆者]）が位階を昇っていった様を
模範として御覧なさい。

彼がプーリア地方（イタリア南東部の地方 [筆者]）を離れることが
確かなものとなった時、

神はドイツの地を

彼の手中へと収めさせたのです。

良い種の植物が

短い間に神の御力によって

その子孫を育んだ様を御覧なさい。

良い種の根からならない樹木が

倒れてしまうのに、

いつの時にも良い種からなる枝は

すくすくと伸びてゆくのです。

神は不誠実と高慢な心を

打ち倒すのです。これまでもしばしばそうされたように。

神に仕える者に幸いあれ！（10569～10584行）

教皇を擁護する側から、「皇帝党—教皇党」という図式のもとで、ホーエンシュタウフェン家のフリードリヒ二世がこれほど顕揚されるのは腑に落ちないことである。何故わざわざイノセント三世の宿敵ともいえるフリードリヒにここまで好意を

寄せる必要があったのだろうか。

ここで「皇帝党—教皇党」という構図から一度身を引き離し⁽¹¹⁾、フリードリヒ二世個人に焦点を当ててみよう。知られているように、フリードリヒの母親はノルマンの王妃であり、フリードリヒ自身は南イタリアで生まれ育ち、その生涯の大半をその地で過ごしたとされている。そのため彼が通常用いていた言語はイタリア語であり、またそれ以外にも彼はいくつかの言語に通じていたとされる。さらにドイツ（語圏）に自ら足を運んだこともまれで、一生の間ほんの数回に過ぎなかったと言われている。こうした彼自身、さらには周囲の人々にとってフリードリヒはどの程度ドイツ人の皇帝と実感されていたであろうか⁽¹²⁾。神聖ローマ帝国皇帝とは別に、南シチリア王国（その後のナポリ王国とシチリア王国）をも統治していた彼にとり、「ドイツ人 (tiutsch)」としてのアイデンティティーは非常に希薄なものだったのではないだろうか。

このフリードリヒ二世に対してトマージンはさらに賞賛を重ねる。

高貴な王フリードリヒ殿、
あなたは知性にも勇気にも優れており、
もしそう望むならば、
実に見事に物事を成し遂げます。
今や自分が賢き方であることを明らかにし
決して終わることなき
賞賛を勝ち得てください。
あなたは何事も成すことができるのです：
真に賢き方であるゆえ、
神に常に仕えているのです。(11787～11796 行)

さらに賞賛は本人のみならず、祖父のフリードリヒ一世やおじのフリードリヒ・フォン・シュヴァーベンにも及び、その際「三」という数の完全性にも触れられる⁽¹³⁾。

私はあなたの一族で二人
大きな権力を持っていた方を知っております。
一人はフリードリヒ皇帝⁽¹⁴⁾で、

もう一人はたしかに
あなたのおじ様です：あなたは
それに続く三人目の方となるのです。
不幸な皇帝は
十字軍の目的地までたどり着けず、
おじ様は目的地に到りましたが、
聖地奪回を成し遂げることはできませんでした。
あなたは三人目の者として当地に到り、
目的をも完遂されるでしょう。私は
三という数には
常に成就の意味があると聞いております。(11797~11810行)

このように親族をも含めて讃えられるフリードリヒ二世は、むしろ郷土イタリアの生んだ、俗界の側から教皇とともに帝国を支えるべき人物であり、その意味でトマーゼの目には「皇帝党—教皇党」という狭隘ともいえる対立は入ってきていない。仮に対立——あるいは区別——というものがトマーゼの中にあるのだとすれば、それは“welsch—tiutsch”という軸によって支えられているのであり、それはまさに著書のタイトルDer Wälsche Gastに反映されているのである。またこの軸に沿って考えると、フリードリヒ二世はwelschの側に位置付けられていることになる。

5

すでに触れたヴァルターの教皇批判においては、「皇帝党—教皇党」の対立というよりは「ドイツ—イタリア」の対立軸の重要性が前面に現れてくるのではないかと、という見解を以前拙稿で述べた⁽¹⁵⁾。これを踏まえて考えれば、トマーゼの“welsch—tiutsch”の対立軸はヴァルターのそれと丁度合わせ鏡のようになっているのではないかと考えられるのである。

まず以下に彼が献金箱を設けさせた背景について述べている箇所を引用する。

貧しい者達を守るために
教皇様がとりなされた

献金箱を各地の教会に
設けるようにと、十字軍行に
援助を行ないたい者は誰でも行なえるようにと。
まことにご理解ください、
皆は十字軍に行こうとする者よりも
それに援助を与えたい者を見つけないのです
(教皇様はそれを良きことのために行なったのです)
それを愚かな者は我々に
教皇様が金儲けのために行なっていると非難しているのです。(11169~11179
行)

さらに、批判はよりはっきりと、当のヴァルターへと向けられる。

良きしもべはしかし今や
教皇様に対しゆえなき非難を向けている、
そやつは自分の高慢さゆえ
教皇様がドイツ人の財産をもって
自分のイタリアの金庫を満たそうとしていると言うのだ！
私の助言さえ聞いていれば、
そやつもそのようなことを言わず、
そうしたくならぬ言葉を
全く口にせずに、
こちらもそれを聞くことがないだろう。(11191~11200 行)

ヴァルターがイノセント四世に「二人のアレマン人⁽¹⁶⁾」と皇帝党のフィリップ・フォン・シュヴァーベンと教皇党のオットー四世をひとしなみに呼ばせることにより皮肉り⁽¹⁷⁾、教皇の周囲の高僧達を帝国を乱す「イタリア人の取り巻き (sinen Welhen)⁽¹⁸⁾」と呼びながら、「ドイツ人の銀貨 (tiutschez silber)⁽¹⁹⁾」を「イタリア人の長持 (welschen schrin)⁽²⁰⁾」に流れ込ませていると非難するのに対し、この「イタリアの客人 (Der Wälsche Gast)」と自ら名乗るトマージンは、これらすべては十字軍行の意義を理解しない「愚かな者 (unser toerscher muot)」がその「高慢さ (sinn hôhen muot)」から「教皇様がドイツ人の財産をもって／自

分のイタリアの金庫を満たそうとしている (daz der bâbest wolt mit tiuschem guot/vüllen sin walhischez schrin!)」という妄言を吐いているのに過ぎないのだ、と反駁しているのである。ここには tiutsch と welsch の正面からの一騎打ちが行なわれとているのだということができらるらう。

6

特にヴァルターと向き合った時には「ドイツ—イタリア」の対立軸に沿った主張を際立たせるトマージンではあるが、前述のおそらくはイタリア人である墮落した生活を送るカトリック司教達へ向けられた批判に見られるように、彼は welsch の側であれば無差別に擁護しようとする無節操な人物ではなかった。また tiutsch の側にもその「騎士達 (riterschaft)」（11347 行）に対しては、「常に有能で最も貴重な騎士達」（1135 行）であると認めており、彼らの十字軍行への参加をこそ願っているのである。つまり、彼が“welsch—tiutsch”の間に見るのは融和不可能な敵対関係ではなく、あくまでも——前近代的ではあるものの——区別としてのネーション概念の萌芽なのである。そしてこれは「教皇—皇帝」という二つの中心を持ついわゆる神聖ローマ帝国の楕円形的構造と何ら矛盾するものではない。

そのためトマージンが「政治的な分野においてはその出生と地位により、諸力 (Gewalten) の分割による聖職者と世俗の権力 (Macht) の共存により均衡のとれた関係を望み、促進しようとし⁽²¹⁾」, 「自らの地位にある聖職者としては、彼の時代の教条的概念に束縛され、教会的かつ宗教的な雰囲気の中に暮らしていたのは当然のことであった⁽²²⁾」とする F. ノイマンの主張はそれとしては全く正しいものであろう。聖職者としてのトマージンはあくまでも神聖ローマ帝国の繁栄・強化を願う中世人であったのである。

※

※

冒頭で述べたように、12 世紀・13 世紀のイタリアにおける書き言葉はラテン語以外は、せいぜい古プロヴァンス語であり、13 世紀にダンテが『神曲』をイタリア語（トスカーナ方言）で著した時に、彼は「靴修理職人の言葉 (lingua dei ciabattini)」で詩作したと物笑いの種になるほどであった。ドイツ語に関して言えば、中世後期にイタリアとドイツとの商取引が盛んになるにつれ、時にヴェネツィアの

ような交易の中心地では職業上の必要に迫られドイツ語の習得が一部の商人の間で広まりはしたものの、それは何ら文化的プレステイジと結びつくものではなかった。

そうした背景において、13世紀初頭(1215/1216)に何故トマージンという聖職者がわざわざドイツ語で大著を著したかについての考察を試みた。主要な点は、トマージンはヴァルターの教皇攻撃への反論という目的を含みながらも、それのみにとどまらず、当時の北方の隣人が“tiutsch”として自分達に向き合ってきた際に、いかに自らを“welsch”として対峙させるかという姿勢であり、それはDer Wälsche Gastという題名によって最もはっきりと表明されているということである。この姿勢によれば、従来の「皇帝党—教皇党」という対立軸に基けば理解し難いオットー四世への批判や、フリードリヒ二世への賞賛が自然と理解できるのである。しかし、それにかわる“welsch—tiutsch”という対立軸は、ヴァルターの教皇批判によって惹起された部分が多く、その意味では「早くやって来すぎた(近代的)ナショナリスト⁽²³⁾」たるヴァルターの磁場に引き込まれているといえよう。ただし、その磁場を一度離れれば、トマージンはむしろ保守的と言える中世人であり、教皇と皇帝という二つの中心を持つ神聖ローマ帝国が円滑に機能し、一丸となって聖地を異教徒から奪還することを望んでいたのである。そしてその上でDer Wälsche Gastという教訓詩も著すこともできたのだと言えるだろう。

注

1. Vgl. Helmut de Boor, Die höfische Literatur, Vorbereitung, Blüte, Aufklärung 1170-1250, die elfte Auflage, bearb. von U. Hennig, München 1991, S. 381.
2. Helmut Glückはトマージンはむしろバイリンガルとして育ったのではないかと主張するが、これも推測の域を出ない(Vgl. Helmut Glück, Deutsch als Fremdsprache vom Mittelalter bis zur Barockzeit, Berlin/New York 2002, S. 76)。要はトマージンが基本的には—後述のようにwelschと表現される—ロマンス語文化を担っている人物であったということである。
3. Die Lieder Walthers von der Vogelweide, I, Die religiösen und die politischen Lieder, hrsg. von Fr. Maurer, Altdeutsche Textbibliothek Nr. 43, Tübingen 1974, S. 50。日本語訳として、高津春久編訳『ミネザング(ドイツ中世叙情詩集)』郁文堂、1970年、313～314頁を参照。
4. Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirklaria, hrsg. von H. Rückert, Quendlingburg/Leipzig 1852, Z. 1549-1554 u. Z. 1769-1778.
5. Steen Botterill, Introduction (In: Dante, De vulgari eloquentia, ed. And transl. by St.

Botterill, New York/Melbourne 1996), pp. XXIII~XXIV.

6. 因みに、ダンテは南ヨーロッパの言語を三分し、それぞれの特徴を、疑問文に肯定的に答える際に *oc*, *oil*, *si* のいずれかを用いるかに求めているが、これによれば南仏詩人の言語は *oc* 語、イタリアの言語は *si* 語に該当することになる (cf. Dante, *De vulgari eloquentia*, p. 16)。
7. ドイツ文学史の枠組みの中で見れば、*Der Wälsche Gast* という作品は一連の非知識人階層に向けた *Lehrdichtung* (教訓詩) のジャンルに属し、それが偶然外国人によって書かれたに過ぎない、と見なされえりし、現にそう見なされてきた。しかし、当時の中世ヨーロッパの精神世界全体を見渡せば、この作品がドイツ語で書かれている事実は非常に異例なことと考えねばならない。この認識の上に立ち、本文以下の三つの可能性を筆者はあえて挙げているのだと理解されたい。そうでないと、この問題提起自体が無意味あるいは滑稽なものとする見なされかねないからである。しかし筆者はそのような見方こそが「ドイツ文学」という狭隘な視点に基く近視眼的なものと考えている。
8. 詳しくは以下の拙稿を参照されたい：「ドイツ」とその「外部」——中世から近代へかけての“welsch”の意味変遷との関連において——』『一橋論叢』第124巻第4号、1999年、18~30頁。
9. 前掲拙稿参照。
10. 前掲拙稿参照。
11. 因みに言えば、ホーエンシュタウフェン家（皇帝党）とヴェルフェ家（教皇党）の対立そのものが、両家の父系相続制の確立により、13世紀に入りやっどクローズアップされてきたのであり、ヴァルターが教皇批判を行なった1200年前後には、未だ微妙なものだったという事実も前掲拙稿42~48頁で指摘しておいた。
12. 現在でもなお、南イタリアやシチリア島ではフリードリヒ二世により建立された城砦や「フェデリコ二世広場」といった名を冠した場所が随所に見られる。
13. 周知のように「三」及びその倍数はキリスト教文化圏では特権的なものとなっており、それはカトリックの「父—子—聖霊」の三位一体、キリストの12人（ユダを除く）の弟子達、さらには（元来はケルト起源であるが）円卓の騎士の人数が24人であることにも現れている。
14. フリードリヒ一世のこと。
15. 前掲拙稿参照。
16. Maurer, a.a.O. S. 50.
17. ドイツ人のことを「アレマン人 (Alman)」と呼ぶのは軽蔑的な用法。
18. Maurer, a.a.O. S. 50.
19. Ebd.
20. Ebd.
21. *Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*, hrsg. von H. Rückert, mit einer Erklärung und einem Register von Fr. Neumann, Berlin 1965, S. XIII.
22. Ebd., S. XLIII.
23. 前掲拙稿48頁。